

『見方を変えれば、なんでもできる』

国際医療福祉大学大学院
助産学分野
吉成 仁美

「全盲者のできること」は、“声から人を判断する”“日常生活全般”。

「できないこと」は“文字を書くこと”“車を運転すること”。

最初、そう、思っていました。

ところが、高橋さんは「全盲の人ができないことはない」と言い切りました。

例えば、運転については使用する目的を絞れば、全盲の人ができないことはない。どこかに行きたければタクシーや電車を使えばいい、ドライブをしたければ誰かに運転してもらえばいいというように。

見方を変えれば、なんでもできるという考え方にハッとしました。

高橋さんの話を聞いて、五感のうちの視覚がひとつ欠けるとその他の感覚が研ぎ澄まされていると感じました。障害者＝可愛そうな人ではない。『GRIC』の活動に感動しました。

点字ブロックの上に自転車を置いてしまう人の心理とは、何だろうか。

「まったく気にしない」「これぐらいなら大丈夫だろう」など、さまざまです。

意識をしなくとも置かれなくするにはどうすればいいのだろうか。監視員がいる朝の時間帯は置かれない。バリケードができたことで止めなくなったという事実から、その人がそこに置いてしまう環境の悪さに目を向けて環境要因を取り除くという考え方や、視点の変換に感心しました。

駅のホームドアの代わりに簡易的に安全を確保する方法として、「白線の内側」ではなく「黄色いブロックの内側」に変更されたことで安全に電車を待つことができるようになった例も、私にとっては今まで気づいたことのない例でした。

視覚を失ったからこそ“見方を変える意識”が高まっているのではないかと感じました。「一つの目的に対して複数の手段があること」を前提に考えることで気持ちの負担が減る。私たち障害をいまはもっていない者も見習うべき視点であると思いました。

貴重なお話ありがとうございました。